



28日(火) 熊本で震度7 いちき串木野は震度5弱……災害への対応力について

地震発生時は一部の生徒が部活動、3年生は三者面談の最中でした。私は1階の校長室にいましたが、気味の悪い横揺れでした。3階で活動していた生徒は、それ以上の揺れを感じたはずですから、恐怖感はかなりのものであったと思います。その後、校内を巡回し、損壊等の被害がないことを確認。串高は、予定どおり本日まで夏季課外を実施することができました。

報道によれば、芦北地方では電気、ガス、水道がストップ。交通も遮断され、甚大な被害の様相です。そのような環境に加えて酷暑の中での生活は、想像を絶するものです。

今年5月に福島県双葉町に行く機会がありました。震災から15年経っても、通常の暮らしには戻っていないという事実を知り、衝撃を受けました。自身の「平和ボケ」を思い知りました。

東北・三陸地方には「津波てんでんこ」という言葉が言い伝えられています。「てんでんこ」とは「てんでんばらばら」という意味。つまり、津波が想定されたら「人のことはかまわずに、各自バラバラで逃げろ」ということです。「自分勝手に薄情な」と誤解するかも知れませんが、決して「自分だけが助かればよい」という意味ではなく、実は以下のような深い意味があるのです。

- 1 「自助原則の強調」……「自分の命は自分で守る」という考え方。ただし、自己責任を強調するだけではないことに注意しておく必要がある。
- 2 「他者避難の促進」……避難する姿を見せることが避難のきっかけとなり、結果的に他者の避難行動を促す「しかけ」となる。
- 3 「相互信頼の事前醸成」……「津波が来たときは、お互いにてんでんこする」という行動を事前に周囲と約束する。この信頼関係が共有されていれば「てんでんこ」の有効性が飛躍的に向上する。
- 4 「生存者の自責感の低減」……生存者は亡くなった人に対して自責的な感情に苛まれやすい。しかし、事前に「てんでんこ」を約束しておくことで、「亡くなった人もてんでんこした(しようとした)にも関わらず、それも及ばなかった」と考え、生存者の自責を低減させることができる。

(参考:「津波てんでんこ」を正しく理解しよう～災害に強い組織づくりへの第一歩～ 加藤真由氏)

岩手県釜石市の小中学校では、この言い伝えをもとに、子どもたちには津波が来た時に「てんでんこ」に避難することが定着しており、東日本大震災において、多くの命が救われたとのことです。地震、津波に限らず、有事の際には、「自分の命は自分で守る」という自助の精神が肝要です。その上で、どんな場面に遭遇したとしても「適切な判断力と想像力」をもとに行動できる力が発揮されなければなりません。生徒たちには、日頃の教育活動を通して、大人としてあるべき判断力と想像力を育てていかなければならないと改めて感じたところです。

防災には「自助」・「共助」・「公助」という三つの考え方がありますが、まずは自分が助からなければ(助かろうとしなければ)、誰かを助けることはできません。「命あっての物種」なのです。自助の精神が希薄な人ほど、のちに他者からの救助が必要になります。

「天災は忘れた頃にやってくる」と言ったのは寺田寅彦(1878～1935)ですが、奇しくも今回被災した熊本の五高(現在の熊本大学)出身の物理学者です。隣県で起きた災害を契機に、忘れないうちに、まさかの時に備えた家庭でのルールを確認してみたいはいかがでしょうか。

夏季課外前半戦が終わりました。充実した夏休みを過ごしてほしいです。

課外に毎日参加することで、生活リズムが維持できたのではないのでしょうか。ボランティア、アルバイト、学校見学など、校長室に手続きに来る生徒がここ数日多かったです。「夏休みだからできること、夏休みにしかできないこと」を!! 後半戦は20日(木)からです。

※ しばらく「串高通信」はお休みします。次回は8/28(金)に発行する予定です。

インスタもご覧ください。串木野高校頑張っています(文責 立森)